

【研究ノート】

## ポトラッチ儀礼の復活と効用

岡田 淳子

### まえがき

20世紀の終末期に、アラスカ州の最南端にあるアネット島のチムシアン・コミュニティを調査したが、そこは先住民村とは思えない、開かれた社会だった。1989年から1999年までの間に4回訪れて親しく係わり、多くの経験をともにした。今回はその中から、1999年に招待されて参加した「ポトラッチ儀礼」について述べる。なおこれは、2011年7月10日に行った、北海道民族学会30周年記念講演を文章化したものである。

### メトラカトラ先住民共同体 (Metlakatla Indian Community)

コミュニティの住民は、1887年にキリスト教の宣教師 W. ダンカン (William Duncan) に率いられて、この地に移住してきた800人余りの人々を祖先に持つ。当時、すでにカナダ・ブリティッシュコロンビア州北西部で約30年、ダンカンの教えを受けていたので、コミュニティのまとまりは堅かった。コミュニティと村は、同一の地域で同一の人々から構成されているが、意識の上では異なっている。すなわち、コミュニティは4つのトーテムに属する親族関係で結ばれているまとまりであり、村は土地に結び付いた行政組織である。

現在のアラスカ・メトラカトラは、もともとトリンギットが住んでいた廃村で、ヨーロッパ系の人びとがやってきて上陸し、船長の名前を付けてポート・チェスターと呼ばれるようになっていた。ダンカンの側近だった数人がここを居住地に選んだのは、①滝になって岩肌を落ちる豊富な水があること、②丸木舟の船着き場に適した緩勾配の砂浜があること、③針葉樹の大木が茂っていること、以上の三つの条件が整っていたからだと書き残されている (Arctander 1909 *The Apostle of Alaska* に詳しい)。

メトラカトラという名は、チムシアン語の「波が静かで霧が多い」という意味であり、カナダにいた時につけた地名をそのまま踏襲した。メトラカトラは今でも、カナダ・ブリティッシュコロンビア州と米国アラスカ州の2か所にあり、たびたび理解が錯綜するので注意を要する。アラスカ・メトラカトラはアメリカ合衆国インディアン保護局 (BIA) の管轄下にあり、アネット島全体と周囲の海を含む19万エーカー余りが、税金のいらぬ信託統治地域「リザベーション (Annette I. reserve)」となっている。これはアラスカ州でただ一か所のインディアン保護区である。

最近の人口は1800人前後で推移している。彼らは1971年に発効した「アラスカ先住民土地請求権解決法 (ANCSA)」の適応を受けず、自力で生きる方向を選んだ。ただし、アラスカ州の法律には従うことにしている。住民の生業は漁業が中心で、かつての林業が凋落して後、日本に学んで捕獲する魚の種類を増やし、水産加工技術を学習し、孵化放流に力を尽くしてきた。20世紀半ばから約40年間、木材および水産加工品の輸出先は、ほとんどが日本企業であった。

### 19世紀のポトラッチとその原義

ポトラッチ (potlatch) という言葉はチヌーク・ジャーゴンに由来する。1770年代に、ヨーロ

ツパ系の人々がこの地域にやってくるまで毛皮交易を始めたが、その時、交易語として使用されたのがチヌーク・ジャーゴンで、700 語近い単語が知られている。しかし一つのまとまった言語ではなく、チヌーク族やヌートカ族の現地語、イギリスやフランスのインドヨーロッパ語の単語を基本にして構成されたという。

ポトラッチはヌートカ語の「与える」という意味から出たもので、富を蓄積した者が再配分することを土台にしている。再配分はさまざまな儀礼を契機として行われるが、表に現れる行事は大盤振舞いの祭宴と贈物を伴ったお披露目である。儀礼の多くは人生の通過儀礼に因んだもので、北西海岸の南部では「成人の儀礼」が、北部では「死の儀礼」が、最も盛大に行われたものであった。この他にしばしばなされる儀礼は、子どもが生まれて一年たったとき、婚約・結婚のとき、家を新築したとき、トーテムポールを建てる時などである。贈物は、かつて毛皮、織物、カヌー、櫂、奴隷などであったが、交易が進んでからは、ハドソン湾会社の毛布や砂糖がこれに代わった。当時の描写によれば、ポトラッチの贈物を集めるために、買い叩いて売り手も共に譲らず、しばしば時間を要して体力勝負になったとのことである。

北西海岸の文化や社会については、19 世紀後半から F. ボアズ (Franz Boas) をはじめとする多くの研究者によって調査され成果が報じられており、アメリカ先住民のなかでは最も研究された文化の一つとあってよい。(菊池／益子訳『北西海岸インディアンの美術と文化』六興出版の 183 ページ～ 益子待也氏の解説を参照されるとよい)

再配分は一般に農耕社会で始まるが、北西海岸地域は採集狩猟社会でありながら穀物農耕並みに富が蓄積できた。富を配分した者は感謝と尊敬を集めるが、やがてランクが上がって階層社会につながっていく。この地域では、貴族、平民、奴隷の 3 階層が認められていた。ランクを上げるために競って、ポトラッチの宴会と贈物は巨大化していったと考えられる。

現在、ポトラッチと言われているような行事がいつごろから始まったかは確かめられないが、文字を持つ人びとが到達したころには既に存在していた。ただし、1778 年や 1791 年に描かれた集落の絵図には、際だった住居の大小が見られないので、それほど盛んではなかったのかもしれない。ポトラッチでは貰った以上の返礼をする慣習が広がり、1880 年代以降、財物を壊したり、砂浜で火にくべたりと、富の競い合いが常識を逸脱していったと報じられている。このことは歴史の事実としてたびたび例に出されるが、これが頻繁に行われたとは思わない。その頃、はしかや天然痘などの伝染病が蔓延し、先住民社会が打撃を受けたことも関係したと思う。そして、カナダおよびアメリカ合衆国政府が先住民の儀礼や風習を禁止したために、ポトラッチ儀礼やトーテムポール建立など特徴的な行事が影をひそめて、伝統的な文化は衰退していった。

復活したのは、第 2 次世界大戦が終結した後の 1950 年に両国政府が政策を転換して、伝統文化の保存に力を尽くし始めたことによる。トーテムポールの彫刻と建立の復活、それに伴ってポトラッチも徐々に行われるようになった。

## 20 世紀末のポトラッチ儀礼

1999 年夏、80 年ぶりに大規模なポトラッチをするからと、メトラカトラ先住民コミュニティーから出席の誘いを受けた。復活後の儀礼の在り方と、現代社会での儀礼の意義を確認する絶好の機会を得て、喜んで参加させてもらった。

## [Memorial Potlatch in Memory of Alma M. Hayward August, 1999]

昨年亡くなった女性アルマ・ヘイワードさんの一周忌の儀礼、すなわち「死を完結させる儀礼」だという。アラスカの南東部に住んで北西海岸文化を受け継いでいる人たちは、「一周忌の儀礼」を盛大に行う。以前にも友人のトリンギット女性が「兄の一周忌」までに準備をしなければならぬと、すべてに先んじて行動していたことを思い出した。アルマ・ヘイワードさんの友人、とりわけ夫のフランク・ヘイワードさんの近親者は、準備に余念がなかった。

ポトラッチを仕切るのは、慣習によればアルマさんの夫方の分族ということになるが、このご夫婦は同じ分族に属しており「二羽のワタリガラス (Double Raven)」として、共同体の人々からも快く受け入れられていた。ここはワタリガラス、ワシ、シャクジラ、オオカミの4つのトーテム・グループからなる社会であるが、他分族の人でなければ結婚できないという族外婚の考えは、次第に薄れているように思われた。ポトラッチの日が近づくにつれ「記念デザイン」のつけられたものをしばしば目にするようになる。ポスター、チラシ、プログラム、贈物のTシャツ、カップ、などがある。

アルマさんは生前、キリスト教に帰依し讃美歌をきれいに歌った。生まれずに死んだ子どもが1人いるが、8人の子どもを産み、14人の子を育てた。写真1はそれらを表したデザインである。デザイナーはW. ヒューソン (Weyn Hewson) で、当共同体出身の芸術家は48人いるそうだが、彼は村内で必要なデザインを一手に引き受けて活動していた。死の完結儀礼は、復活後も大切に盛大に行われている。

コミュニティーの墓地は村の南西部にあり、アルマのお墓は墓碑がたてられ、花できれいに飾られた (写真2)。作業は女子の孫と夫方の姪たちが中心に行っていた。死者は、西に向かって旅立つそうである。

母系制なので、ここに並んだアルマの娘5人が遺産を受け継ぐことになる (写真3)。現在は大掛かりな遺産はないが、娘たちが相続することが大切である。アルマの象徴である Double Raven のローブ (Button Blanket) は、長女の長女で郵便局に勤める孫娘に引き継がれた。

ポトラッチに対する返礼がアルマの夫であるフランク (Frank R. Hayward) から示された。それは、漁船が停泊する港の防波堤で、フランクはそれについて、「私は若いころ、漁師になりたての若者がやっと手に入れた漁船を暴風雨で壊されて流され、砂浜の地面を拳で叩いて号泣している姿を見た。その時、しっかりとした防波堤さえあれば防げるのにも思い、いつかきっと自分の力でコミュニティーのために防波堤を造ろうと誓った。ずいぶん長くかかってしまったが、今、その約束を果たすことが出来た」と語った (写真4)。

返礼の贈物はもう一つあって、ヘイワード家の女性たちが村の北側に陸上競技場を造って村に寄贈した。ポトラッチの当日はまだ完成していなかったが、整地はすでに終わっていた。

ここまでが直接一周忌に係る「死の儀礼」である。参会者はアルマの死に対する悲しみを新たにし、フランクの語りにコミュニティーを思う気もちの深さを知って感激した。ポトラッチは感銘を与えることが大切な要素の一つである。その後、復活してからのポトラッチが複合型になっていることを示す儀礼が続いた。そのうちの幾つかを挙げる。



写真1 ポトラッチの記念デザイン



写真2 墓所を造り上げる



写真3 会場のスクリーンの前に並んだ  
ワタリガラスたち



写真4 返礼の贈物

### 【同時に行われたその他の儀礼】

**共同体の一員に迎え入れる儀礼**：父が住民であっても母がそうでなければ、母系制のため共同体の成員にはなれない。この機会を利用し、父以外の分族の養子になる儀礼を行い、それを母の分族として成員になる。また、共同体の一員が他の土地で結婚し戻ってきた場合、結婚相手を別の分族の養子にする儀礼をおこなうことがしばしば起こる。お互いに仲間になり気持ち良く暮らすためには必要な手続きである。

**子どもが一人前になったことを祝う儀礼**：今回は男子の成人儀礼だけで、木製の被りマスクを着け、自分で作ったカヌーの櫂を持ち、新しいローブを着て登場した。かつては女子の成人儀礼の方が盛大に行われ、多くの財産が与えられたが、この風習は影をひそめてしまったのかもしれない。若い女性たちが新しく縫い取りをした民族衣装のローブを掲げて見せて回ったのが、成女式の変化したものと見ることもできる。

**結婚50年の披露儀礼**：金婚式に相当する。紹介された夫妻が肩を組んで登場し、スキップをしながら会場内を回るものであった。この共同体では、毎年カレンダーを出しているが、それには子どもの出生（誕生日）、結婚の日（結婚記念日）を名入りで表記している。かつての出生や

結婚のポトラッチが簡略化されたものと見るべきであろう。

**死を知らせる儀礼**：分族の長または一門の長から、亡くなった人についての報告があった。一年後に「死を完結させる儀礼」が行われるかどうかはわからない。この会場で「母が亡くなったがポトラッチはできないので」と言って、小さなもの（たとえば太い糸で編んだ花瓶敷きのようなもの）を持ってきて配っていた人もいた。共同体の全員に知らせることが大切で、行事をしなくても同じように扱われるのだと感じた。

### [連帯を強める共食と音楽、舞踊の贈物]

ポトラッチ儀礼は3日間つづけられたが、一日目は儀礼が主で、飲み物と干した鮭などのつまみ、カップケーキ、パウンドケーキ程度のスイーツが並んでいた。アルコールは島内では禁止なので、一切無しである。

室内の周囲には高齢者用にテーブルとイスが並べられ、ご馳走が取り分けられて運ばれてきた(写真5)。長老を大切にする社会である。長老の仲間に私も入れて貰えたらしい。さまざまに料理した鮭、サケ、さけである(写真6)。

声の響く母娘の歌は、いつ聞いてもこの文化に相応しい(写真7)。輪舞のときは、俯瞰して写真を撮るよう誘ってくれた。親切で、気の付く住民たちである(写真8)。



写真5 高齢者のテーブル



写真6 さまざまな鮭のご馳走



写真7 母娘の歌



写真8 輪舞

二日目は、地産地消のたくさんのご馳走が次から次と振る舞われた。三日目は、歌と踊り、とりわけ儀礼のときのみ使う「箱太鼓 (Box Dram)」を響かせ、成人の踊手たちが全員で輪舞を行うのが圧巻であった。料理は、アルマと少し離れた関係にあるワタリガラスの人たちが精を出し、歌と踊りは、他の分族の人々も加わって盛大に行われた。鮭を使った様々な料理が、

学校給食さながらに作り出され、海藻料理やコメの炊飯、パンなどもキャファテリアのように並んでいた。彼らは、乾燥した海苔をお粥のようなご飯に混ぜ、塩味で食べるのが絶品だと言って、日本人との共通性を示そうとしていた。

杵太鼓を持ち、ボタンローブの民族衣装に身を固めた母娘を先頭に、途切れることなく会場を歌いながら練り歩く。アラスカでは歌は個人の持ち物で、母親から娘へと引き継がれるのが普通だが、この共同体では結社的なものはなく、すべてが共同体の持ち物である。観光客に見せるのとは何かが違う。ポトラッチ儀礼を意識してか目を瞠るばかりで、子どもたちも床に座って真剣に眺めていた。

やがて仮面をつけた人たちが現れて踊りながら歩く。仮面はそれぞれの守護神なのだそうだ。歌はマイクも使わず、肉声でいつまでも続いた。最後は、ボックス・ドラムを敲いての全員の輪舞、大太鼓の低音が村中を轟き亘る壮厳さであった。住民たちの感動は極限に達し、子どもたちは自分もいつかはこの祭りの中心にいたいと願ったに相違ない。

### 【次回に向けての寄付儀礼】

ポトラッチ儀礼の最後は、この感激冷めやらぬ中での寄付儀礼である。会場の中央に大型のローブを広げ、先ほどの母娘が、「ワタリガラスの家を訪問してください」と大声で呼びかけ、杵太鼓を小刻みにたたく。何か呪文のようなものを唱えたが、私にそれをとらえることは出来なかった。4分族に向かってそれぞれ呼びかけ、ローブの上に積まれた紙幣をそのローブで包んで、回収する。私はこの時初めて声を上げ、私にも訪問させてくださいと言った。その希望は叶えられ、分族に属さない人たち一春訪れて秋に帰るので **Butterfly** としてまとめられる喜びが、出て行ってもう一つ紙幣の山が出来た。どのくらいの金額になったか分からないが、10ドルや20ドル紙幣が多かったとしても、1万~2万ドルにはなったと思われ、次のポトラッチの資金になるそうである。

### まとめと補足

復活後のポトラッチは、一人の首長 (**Chief**) が取り仕切るのではなく、多くの場合公的なまとまりで行われるようになった。かつての大家族の親族組織が崩れ、夫婦または個人中心に結び合わされた組織が変わったことが、ポトラッチを変えたともいえる。したがって、親族を挙げての贈物、返礼ではなく、個人に向けては小さな贈り物がなされ、返礼は公に役立つものが選ばれていた。人生行事を披露するものであることは変わっていない。

ポトラッチに招待された時、私は何をすべきかと考えた。心を通じ合うようになった、ワタリガラス・クランの友人は、壁掛けにするような小さなボタンブランケットを、「私には20枚割り当てられたのよ」と言いながら一生懸命に作っていた。その一枚は当日、主催者側から私のところにも届いた。贈物はみな小さなもので、いくつかの手芸品や記念デザインの付いたカップなどだったが、毎日、両手に余るほどになった。私は、吊手のある大型のトレイにキャンディーをたくさん入れて、それを鶴の折り紙で飾った。思いついたのが遅かったので、ぎりぎりまで鶴を折り持参したところ、きれいだと喜んでもらった。子どもたちへの贈物になったそうである。

防波堤の返礼には驚いた。一朝一夕にできるものではないので、住民たちはすでに知っていたのかもしれないが、共同体として必要な物がこの機会に選ばれたことになる。

次の大きな変化といえば、共同体の誰もが幸せになるように考えて対処する場にしているこ

とであった。クランへの加入儀礼は個人のためというより、共通の認識を作るもので、一回の機会に複合的に行われ、そのことが共同体の結びつきを深くする。歌と踊り、共食は、それ自体楽しみながら連帯感を強めるものであるが、伝統文化を受け継いでゆくためにも効果があり、ことに次世代の子どもたちに学ばせる良い機会になっている。

一年前に、チムシアン民族会議の8か所の村が集まったポトラッチがあったが、お土産は携えられるもの、主になっていたのはユーラコンの魚油であった。話し合いとゲストハウスへの宿泊、返礼も村で作られた彫刻品を主としていた。毎年集まってお互いが意見交換し、問題があれば解決するものに変わっていた。今回のポトラッチへの住民の参加は歩けるもの全員で、3日間のうち、自分の出られる時間帯に顔を出して楽しんでいたように思われる。次回に備えての寄付は選ばれた者がするのではなく、全員が平等に機会を与えられ、個人が特定されないように考えられているのが素晴らしいと思った。

(おかだ・あつこ／北海道立北方民族博物館)